

2018年12月9日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「系図に見る慰めと恵み」

聖書：マタイによる福音書1:1～17

この系図に五人の女性が出てくる。ユダヤは堅い家父長社会で、男性でなければ家を継ぐことは出来ないから、当然、系図の中に女性の名が記されることはないが、しかし、この系図には女性が登場する。3 節の「タマル」(創世記 38 章)、5 節の「ラハブ」(ヨシュア記 6 章)と「ルツ」(ルツ記)、6 節の「ウリヤの妻(バト・シェバ)」(サムエル記下 11 章)、そして、16 節の「マリア」である。どの女性も男性社会の中で苦難を強いられた。その現実の差別の只中で、しっかりと時代を生きることが記されている。マタイ福音書の系図は、ユダヤの伝統にはそぐわない、家父長制に反する書き出しになっている。女性を蔑視する社会に対して、当時としては精一杯の抵抗がそこにある。

もう一つ。この系図は、ダビデ王、ソロモン王と、イスラエルの歴代の王を記し、イエスをユダヤ人の王として位置づけようとしている。しかし、歴代の王の歩みは、ダビデ、ソロモンまでは繁栄をもたらすが、その後の王は、内部争いを繰り返し、罪を重ね、国は二つに分裂し、偶像礼拝を重ね、ついに国は滅び、バビロン捕囚の目に遭う。この系図は、繁栄の歴史を記すのではなく、段々と尻すぼみするような内戦や戦争を繰り返す中で、国が滅び、捕囚の民の歴史を辿り、植民地とされた状況の中で、段々と小さくなっていく現状がそこに記されている。そして最後に、抑圧の只中で、イエス・キリストが誕生するというわけ……。キリストは、この抑圧された社会を力づくで押し返すためにこの世に誕生して来られたのではない。この抑圧された社会の中で、抑圧された人々と共にあろうとされたお方。このイエス・キリストの系図には、そのようなメッセージがあるのかと思う。

最後にこの系図は今なお系図として広がり続けている。イエス・キリストと父親のヨセフには、血の繋がりはない(16 節)。血の繋がりは無いにもかかわらず、この系図は成立させている。ここからは血の繋がりは無いにしても信仰による繋がりにおいて、私たちはイエス・キリストの系図の中に入れさせて頂くのである。先に召された方々と私たちは、信仰において、繋がっているのである。この系図に隠されている慰めと恵みを覚えたい。(神谷)